

VI) 情報の提供、諸報告に関する事項

1. 情報の提供方法及び提供先

1) 郵送、FAX (*印は注意報のみ)

- 国関係
 - *農林水産省消費・安全局植物防疫課、*同中国四国農政局、同松江統計・情報センター、同島根農政事務所(地域第一、二課)、気象庁松江地方气象台、同西郷測候所。
- 独立行政法人
 - 農業環境技術研究所、農業・生物系特定産業技術研究機構 中央農業総合研究センター、同果樹研究所 生産環境部、同果樹研究所ブドウ・カキ研究部、同近畿中国四国農業研究センター、同野菜茶業研究所。
- 他県関係
 - *鳥取、*岡山、*広島、*山口、*徳島、*香川、*愛媛、*高知、各府県担当課。
- 県内関係
 - 島根県農林水産部 農業経営課、同生産振興課、各松江、木次、出雲、川本、浜田、益田農林振興センター、各安来、仁多、掛合、大田、津和野地域農業普及部、中山間地域研究センター、中海干拓営農センター、農業試験場、花振興センター、農業大学校、隠岐支庁 農業普及部(島後、島前地域指導課)、島根県立松江農林高等学校、同出雲農林高等学校、同辻摩高等学校、同矢上高等学校、同益田産業高等学校、同図書館、各市町村、各病害虫防除員
- 県内団体
 - 島根県農業協同組合中央会、全国農業協同組合連合会島根県本部、島根県農業共済組合連合会、県内各農業共済組合、農業振興協会、島根県農薬卸商協会。
- 報道機関
 - 山陰中央、朝日、毎日、読売、サンケイ、中国、島根日日各新聞社出雲支局・通信部、日本農業新聞松江支局・中国四国支所、NHK松江放送局、同出雲通信部、山陰放送、同ラジオ業務部、山陰中央テレビ放送局、日本海テレビ

2) ホームページ

発生予察情報(発生予報、注意報、臨時情報)、技術情報

2. 発表状況

(1) 発生予察情報の発表状況

種 類	発表回数	発表部数	対 象 病 害 虫
発生予報	6回	380部	<ul style="list-style-type: none"> ○イネ 葉いもち2回、穂いもち3回、紋枯病4回、白葉枯病3回 縞葉枯病2回、萎縮病1回、黄化萎縮病1回、ヒメトビウ ンカ3回、ツماغロヨコバイ5回、ニカメイチュウ4回、 セジロウンカ2回、トビイロウンカ3回、コブノメイガ2 回、斑点米カメムシ類3回、イネドロオイムシ1回、イネ ミズゾウムシ2回 ○ムギ うどんこ病1回、赤かび病1回、さび病類1回 ○ダイズ ハスモンヨトウ2回 ○ナシ 黒斑病5回、黒星病4回、赤星病1回、シンクイムシ類4 回、ハマキムシ類2回、ハダニ類5回、アブラムシ類3回、 カメムシ類1回 ○ブドウ 晩腐病3回、さび病3回、褐斑病4回、べと病3回、黒と う病1回、灰色かび病1回、ブドウトラカミキリ2回、 フタテンヒメヨコバイ4回、チャノキイロアザミウマ4回、 ハダニ類2回 ○カキ 円星落葉病1回、炭疽病1回、うどんこ病3回、カキミガ 2回、チャノキイロアザミウマ1回、カメムシ類3回、 カキクダアザミウマ1回 ○果樹全般 カメムシ類2回

種 類	発表回数	発表部数	対 象 病 害 虫
発生予報			○ハクサイ モザイク病 1 回、軟腐病 2 回、白斑病 1 回、黒斑病 1 回、 べと病 1 回 ○キャベツ 黒腐病 2 回、菌核病 2 回 ○ダイコン モザイク病 1 回 ○アブラナ科野菜 コナガ 2 回、ハスモンヨトウ 2 回、アオムシ 2 回 アブラムシ類 1 回 ○メロン べと病 2 回、ハダニ類 2 回、アブラムシ類 2 回 ○タマネギ ボトリチス属菌による葉枯れ 1 回、べと病 1 回、 腐敗病・軟腐病 1 回 ○イチゴ 灰色かび病 1 回、うどんこ病 3 回、ハダニ類 1 回 アブラムシ類 1 回
特 殊 報	1 回		○キクえそ病 1 回
注 意 報	5 回		○イネいもち病(葉いもち) 1 回 ○果樹カメムシ類 1 回 ○斑点米カメムシ類 1 回 ○イネいもち病(穂いもち) 1 回 ○ハスモンヨトウ 1 回
臨時情報	3 回		○果樹カメムシ類 1 回 ○イネいもち病 1 回 ○MBI-D剤耐性菌 1 回

3. 発表内容

1) 特殊情報

(1) 第1号(平成16年 12月22日)

キクえそ病の本県での初発生が確認されたので特殊報を発表します。

【概況】

12月上旬、出雲市の施設栽培キク(品種:神馬)において、葉の退緑斑点や茎のえそ症状を示株が数株認められた。島根県農業試験場で病原ウイルスの検定を行った結果、キクえそ病(病原:TSWV)であることが判明した。

本病原ウイルスの発生は、野菜類、花き類を中心に平成6年頃から全国的に急速に拡大しているもので、本県においては平成2年5月に安来市のダリアで初確認されている。その後、平成13年5月に邑智郡旧瑞穂町、那賀郡弥栄村のトマトやナスで発生が認められた。キクでの発生は初めてである。今後、本病原ウイルスの発生拡大や定着が懸念される。

- 1 病害虫名 キクえそ病
- 2 病原名 トマト黄化えそウイルス(TSWV:tomato spotted wilt virus)
- 3 作物名 キク
- 4 初発生場所及び面積 出雲市(1圃場約3a)
- 5 発生生態

1) 病徴

葉では、退緑斑点、輪紋えそを生ずる。茎ではしばしばえそ条斑となり、縦断面をみると維管

束や髓部が褐変しているのが観察される。甚だしい場合には茎が湾曲し奇形となる。

葉の輪紋えそ、茎のえそ条斑



茎内部の褐変



湾曲した重症株



2) 伝染経路

本病原ウイルスは、アザミウマ類によって媒介される。中でもミカンキイロアザミウマにより効率良く伝搬される。その他、接触伝染性は認められるが弱く、種子伝染及び土壌伝染はしない。

6 防除対策

1) 発生が認められた場合、二次伝染源にならないようにアザミウマ類を対象とした防除（薬剤散布や除草等）を徹底するとともに、発病株を早急に抜き取り処分し、圃場内外の作物及び雑草等への感染を防ぐ。

2) ハウスなど施設の開口部を光反射ネットで覆い、アザミウマ類の侵入を防ぐ。

7 参考事項

1) TSWVの寄主範囲は非常に広く、多種に及ぶ。

花き類：キク、ガーベラ、ダリア、ペチュニア、シクラメン、トルコギキョウ、インパチェンス、他。

野菜類：トマト、ナス、ピーマン、レタス、ホウレンソウ、ネギ、他。

その他：タバコ、他。

2) ミカンキイロアザミウマは、薬剤抵抗性が発達し、寄主範囲が広く、耐寒性がある。

花き類：バラ、ガーベラ、キク、カーネーション、シクラメン、トルコギキョウ、インパチェンス、ホウセンカ、ニチニチソウ、サルビア、他。

野菜類：イチゴ、トマト、ピーマン、ナス、メロン、キュウリ、レタス、他。

果樹：ブドウ、ミカン、他。

雑草：カラスノエンドウ、セイヨウタンポポ、シロツメクサ、セイタカアワダチソウ、他。

3) 島根県では、平成7年にミカンキイロアザミウマの発生を初めて確認している。平成11年の調査では、調査した28市町村の内、14市町村での発生を確認した。

4) ミカンキイロアザミウマは、花粉を好むので花を中心に発生調査をすると効率的である。

8 その他

疑わしい症状が発生している場合は、最寄りの農林振興センター（農業普及部）又は病虫害防除所に連絡する。

2) 注意報

(1) 第1号（平成16年 7月 1日）

葉いもちの病勢 依然として活発

本年のイネいもち病の発生は初発生、全般発生期とも平年より早く、初期の病勢が活発であったことから、6月16日付けで臨時情報を発表し、注意を喚起してきました。しかし、その後も病勢は鈍化することなく進展し、一部ではずり込み症状を呈するなど発病程度の高い圃場が認められます。今後も曇りや雨の日が続くと予想されており、重篤な被害が懸念されますので注意報を発表します。現地では発生状況の把握に努め、適切な防除対策を講ずるよう指導願います。

1. 病害虫名 いもち病（葉いもち）
2. 発生地域 県下全域（主としてコシヒカリ栽培地帯、特に長期持続型箱処理剤を使用していない圃場）
3. 発生時期 7月上旬～下旬
4. 発生量 やや多い～多い
5. 注意報発表の根拠
 - 1) 6月29日に行った県東部の巡回調査では、発生圃場率が57.5%（平年値29.6%）、発病株率は29.5%（平年値9.6%）といずれも平年値を大きく上回っており、広範囲に葉いもちの発生がみられている（下表参照）。
 - 2) 6月下旬の病害虫防除員による県内一斉調査でも発生圃場率7.7%（前年4.7%）、発病株率0.8%（前年0.2%）と、発生量はいもち病が多発した前年よりも多い。
 - 3) 県東部発生圃場の56.5%と、多くの圃場で進展型病斑が観察される。また、慢性型病斑も長径が長い大型病斑が目立ち、多くの胞子が形成されているものと推察される。
 - 4) アメダスデータから算出された葉いもちの感染好適日は、6月26～28日に県内のほぼ全域で出現しており、現在の感染（潜伏）量はやや多いものと考えられる。
 - 5) 向こう1か月間の気象予報では今後不順な天候が続くと予想されている。また、穂肥の施用や天候の回復後はイネの養分吸収が旺盛となり、罹病しやすい状態がしばらく続くものと考えられる。
6. 防除対策及び防除上の注意事項
 - 1) 圃場内に放置された置き苗は伝染源となるので、至急処分する。
 - 2) 葉いもちの発生がみられる圃場では早急に散布剤（液剤、粉剤等、次頁参照）による防除を実施する。
 - 3) 現在発生のみられない圃場でも、潜伏感染による発病が見込まれることから、発生状況に注意し、早期防除を心掛ける（次頁参照）。
 - 4) 早期栽培稲等では穂いもちの伝染源となるので、特に注意が必要である。
 - 5) 雨が降り続く場合には雨の止み間に散布する。この場合、散布後ほぼ3時間経過すれば、降雨の影響は少ない。しかし、この時間内におよそ5mm以上の降雨があると防除効果は減退するので、散布間隔を短縮する。
 - 6) 薬剤の使用にあたっては、農薬の使用基準ならびに本県農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。

表 いもち病の発生状況

調査年次	発生圃場率(%)	発病株率(%)
本年	57.5	29.5
前年	2.5	0.1
平年	29.6	9.6

注) 6月29日現在

農薬名	使用時期	10a当たり	
		使用回数	使用量・濃度
液剤			
ブラシン水和剤	収穫30日前まで	2	1000倍
ブラシンプロアブル	収穫21日前まで	2	1000倍
ラブサイド水和剤	収穫21日前まで	穂ばらみ期以降は4回	1000～1500倍
ラブサイドフロアブル	収穫21日前まで		1000～1500倍
ビームゾル	収穫7日前まで	3	1000倍
デラウスフロアブル	収穫14日前まで	2	1000～1500倍
粉剤			
ブラシン粉剤DL	収穫21日前まで	2	3～4kg
ラブサイド粉剤DL	収穫21日前まで	穂ばらみ期以降は4回	3～4kg
ビーム粉剤	収穫7日前まで	3	3～4kg
アチーブ粉剤DL	収穫14日前まで	3	3～4kg

デラウス粉剤DL	収穫14日前まで	2	3～4 kg
水面施用剤			
オリブライト1キロ粒剤	葉いもち初発の10日前～10日後 (収穫45日前まで)	1	1kg
オリブライトパック	葉いもち初発の10日前～10日後 (収穫45日前まで)	1	20個
コラトップ粒剤5	葉いもちには初発10日前～初発時 穂いもちには出穂30～5日前まで	2	3～4 kg
コラトップ1キロ粒剤12	葉いもちには初発10日前～初発時 穂いもちには出穂30～5日前まで	2	1～1.5kg
コラトップジャンボ	葉いもちには初発20日前～初発時 穂いもちには出穂30～5日前まで	2	10～13個
コラトップパック	葉いもちには初発20日前～初発時 穂いもちには出穂30～5日前まで	2	10～13個
アチーブ粒剤7	葉いもちには初発7～10日前まで 穂いもちには出穂5～30日前まで (収穫21日前まで)	3	3～4 kg
アチーブ1キロ粒剤24	葉いもちには初発7～10日前まで 穂いもちには出穂5～30日前まで (収穫21日前まで)	3	0.75～1 kg
ブイゲット粒剤	葉いもち初発の7～20日前 (収穫45日前まで)	2	3 kg
オリゼメート粒剤	葉いもちには初発7～10日前まで 穂いもちには出穂3～4週間前まで	2	3～4 kg
オリゼメートパック	葉いもちには初発7～10日前まで 穂いもちには出穂3～4週間前まで	2	20～26個
オリゼメート1キロ粒剤	葉いもちには初発7～10日前まで 穂いもちには出穂3～4週間前まで	2	1～1.3kg

(2) 第2号(平成16年 7月 1日)

果樹を加害するカメムシ類の発生量が多く、カキやナシなどで被害が多発生する恐れがありますので注意報を発表します。現地では発生状況の把握に努めるとともに、発生園では適切な防除対策を講ずるよう指導をお願いします。

記

1. 病害虫名 カメムシ類(チャバネアオカメムシなど)
2. 発生地域 県下カキ、ナシ栽培地帯
3. 発生時期 7月初旬～
4. 発生量 多い
5. 注意報発表の根拠
 - 1) 予察灯でのチャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシの誘殺数は平年に比べ多く推移している。特に6月第4半旬から第6半旬の合計が426頭(平年値98.1頭)と多く誘殺された(第1図)。
 - 2) チャバネアオカメムシの集合フェロモンにおける誘殺数は6月第4半旬から第6半旬までの合計が1,656頭と急増し、今後果樹カメムシ類の飛来、加害が活発化すると考えられる(第1表)。
 - 3) 6月24日の巡回調査において果実の被害を確認した。今後カキや無袋栽培のナシなどで被害が発生する恐れがある。なお、有袋栽培のナシでも果実の肥大にともない果実袋を通して加害される恐れがある。
 - 4) 本年はスギ・ヒノキの花粉の飛散が平年に比べ少なく、毬果は少ないと予想され果樹園への飛来が平年に比べ早くなると予想される。
 - 5) ナシ(無袋)の摘果作業はほぼ終わっている。カキでは摘果作業が行われているが、果実の被

害の有無に注意する。

6. 防除対策および防除上の注意事項

- 1) 山間地や山沿いの園ではカメムシ類の発生加害が多いので特に注意する。
- 2) カメムシはスギ・ヒノキの毬果で増殖し、果樹園に移動するので付近のスギ・ヒノキについても観察する。
- 3) 薬剤の使用にあたっては、農薬使用基準ならびに本県農作物病虫害雑草防除指針を遵守する。

7. 薬剤による防除

1) 種類および濃度

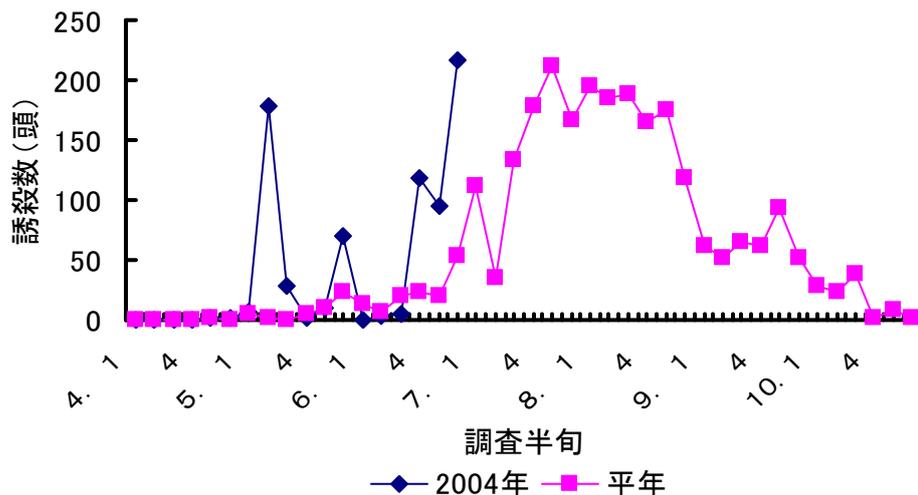
使用基準（平成16年度農作物病虫害雑草防除指針参照）

薬 剤 名	カ キ		ナ シ	
アクタラ顆粒水和剤	2,000倍	3日前/3回		
アーデント水和剤	1,000倍	7日前/3回	1,000倍	7日前/3回
アグロスリン水和剤	1,000~2,000倍	前日/3回	1,000~2,000倍	前日/3回
アドマイヤー水和剤	1,000倍	7日前/3回	1,000倍	30日前/2回
アドマイヤー顆粒水和剤	10,000倍	7日前/3回		
アディオソラブル	2,000~3,000倍	7日前/5回	2,000倍	前日/2回
アディオソフロアブル			1,500倍	前日/2回
サイアノックス水和剤	1,000倍	45日前/3回		
ジノテフラン水溶剤(顆粒)	2,000倍	7日前/2回	2,000倍	7日前/2回
スカウトフロアブル	1,500~2,000倍	7日前/5回	1,500倍	前日/5回
スプラサイド水和剤			1,500倍	7日前/3回
スミチオン水和剤40	800~1,000倍	45日前/3回		
スミチオン乳剤	1,000倍	30日前/3回	800~1,000倍(無袋)	21日前/6回
スミチオン粉剤	6kg/10a	30日前/3回		
テルスター水和剤	1,000~2,000倍	14日前/2回	1,000~2,000倍	7日前/2回
トレボン水和剤	1,000倍	30日前/3回	1,000~2,000倍	14日前/3回
PAP水和剤40	800倍	30日前/4回		
PAP粉剤3DL	6kg/10a	30日前/4回		
ベストガード水溶剤			1,000倍	14日前/3回
MR.ジョーカー水和剤	2,000倍	14日前/2回	2,000倍	14日前/2回
マブリック水和剤20	2,000倍	30日前/2回	2,000倍	30日前/2回

2) 散布時期および回数

発生に応じて数回散布する。

3) 散布量：10 a 当たり 液剤300~400ℓ、粉剤 6 kg



第1図 予察灯における果樹カメムシ類の誘殺数

1表 集合フェロモンによるチャバネアオカメムシ誘殺状況

月・半月	H16年	H15年	H14年	H13年	H12年	H11年
6 / I	19	3	58	13	11	6
II	21	5	32	8	5	8
III	1	13	32	0	8	0
IV	686	15	45	10	8	0
V	319	12	7	12	17	0
VI	833	1	4	6	51	1

(3) 第3号 (平成16年 7月15日)

斑点米カメムシの発生が多く、侵入は早い！

アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシなど斑点米カメムシ類の発生が多く、周辺雑草地やすでに出穂したハナエチゼンではカメムシ類が高密度に生息する圃場がみられます。今後ハナエチゼン、コシヒカリ等の出穂に伴い、カメムシ類の圃場への侵入加害が増加し、斑点米が多発生する恐れがあるので注意報を発表します。

記

1. 病害虫名 斑点米の原因となるカメムシ類
2. 発生地域 県下全域
3. 発生時期 7月中旬～8月
4. 発生量 多い
5. 注意報発表の根拠
 - 1) 7月12～13日に出穂している圃場ですくい取り調査を行ったところ、発生圃場率は78.6%(平成：7月下旬63.9%)、平均頭数は5.1頭(平成：同5.0頭)でいずれも平成を上回っている。
 - 2) 病害虫防除員による圃場周辺雑草地でのすくい取り調査では、カメムシ類合計で4.5頭/10回振り(昨年同期：2.2頭)、調査地点の35%(同：39%)で捕獲され、圃場周辺での発生量が多い。
 - 3) 1ヶ月予報(7月9日広島地方気象台発表)によると、気温は平成並か高く、晴れる日が多い見込みであり、カメムシ類の圃場への侵入が増加すると考えられる。
6. 防除対策および防除上の注意事項
 - 1) 圃場周辺の除草は出穂の10日前までに行う。出穂期近くなるとの除草はカメムシを水田内へ追い込むことになるので行わない。やむを得ず除草する場合は除草作業後に粉剤、液剤での即時防除を行うようにする。また、水田内外のヒエはカメムシ類の増殖源となるので早急に処分する。
 - 2) 薬剤による防除は、第1回目は穂揃期の3日後、第2回目はその10日後に散布する。その後、圃場に成虫や幼虫の発生が認められる場合には追加散布を行う。畦畔などにイネ科雑草がある場合は、畦畔を含めて散布する。広域的な一斉防除を行うと効果的である。また、本年のイネの出穂期はやや早まり防除時期も早まると予想される。
 - 3) 薬剤の使用に当たっては、農薬の使用基準ならびに農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。
7. 薬剤による防除
 - 1) 種類、使用時期、使用回数及び使用量・濃度(本田期)

薬 剤 名	使用時期、使用回数及び使用量・濃度(本田期)
スミチオン乳剤	収穫21日前まで 3回以内 1000倍
スミチオン粉剤3DL	収穫14日前まで 3回以内(ただし出穂前は1回) 3～4kg/10a
バイジット乳剤	収穫30日前まで 1回以内 1000倍
バイジット粉剤2	収穫21日前まで 2回以内 3～4kg/10a
PAP乳剤	収穫 7日前まで 3回以内 1000倍
PAP粉剤3	収穫 7日前まで 3回以内 3～4kg/10a
トレボンEW	収穫21日前まで 3回以内 1000倍
トレボン水和剤	収穫21日前まで 3回以内 2000倍

薬 剤 名	使用時期、使用回数及び使用量・濃度(本田期)		
トレボン乳剤	収穫 21 日前まで	3 回以内	2000倍
トレボン粉剤	収穫 7 日前まで	3 回以内	3~4kg/10a
MR. ジョーカーEW	収穫 14 日前まで	2 回以内	2000倍
MR. ジョーカー粉剤	収穫 7 日前まで	2 回以内	3~4kg/10a
ベストガード粉剤	収穫 14 日前まで	4 回以内	4kg/10a
ベストガード粒剤	収穫 14 日前まで	4 回以内	4kg/10a
アドマイヤー粉剤	収穫 21 日前まで	2 回以内	4kg/10a
チェス水和剤	収穫 14 日前まで	2 回以内	2000倍
ジノテフラン粉剤	収穫 7 日前まで	3 回以内	3kg/10a
ジノテフラン粒剤	収穫 7 日前まで	3 回以内	3kg/10a
ダントツ水溶剤	収穫 14 日前まで	3 回以内	4000倍
ダントツ粉剤	収穫 14 日前まで	3 回以内	3~4kg/10a
ダントツ粒剤	収穫 14 日前まで	3 回以内	3~4kg/10a

2) 散布時期および回数

穂揃期3日後とその10日後の2回、その後は発生に応じて散布する。

3) 散布量

10a 当り液剤150㍓、粉剤、粒剤は所定量を散布する。

8. 附表

第1表 出穂した水稻におけるカメムシ類の発生状況(7月下旬)

年次	発生圃場率 (%)	合計 (頭)	ホソハリカ メムシ	トゲシラホ シカメムシ	シラホシカ メムシ	クモヘリカ メムシ	アカスジカ スミカメ
※2004	78.6	5.1	0.3	0.3	0.0	0.0	4.5
平均	63.9	5.0	2.0	0.7	0.2	0.4	1.6
2003	78.0	5.0	1.6	0.7	0.4	0.1	2.1
2002	46.0	1.6	0.7	0.3	0.0	0.0	0.6
2001	85.3	10.9	4.1	1.1	0.1	0.9	4.7
2000	80.5	9.9	2.7	2.0	0.2	1.2	3.8
1999	82.6	6.8	2.1	1.5	0.6	1.6	1.0
1998	52.0	3.1	1.2	0.4	0.0	0.0	1.5
1997	56.3	3.3	1.8	0.2	0.0	0.0	1.3
1996	41.7	1.0	0.5	0.2	0.0	0.3	0.0
1995	55.6	2.9	2.2	0.2	0.2	0.2	0.1
1994	60.6	5.1	3.4	0.4	0.1	0.0	1.2

※本年は7月中旬の調査である。

(4) 第4号(平成16年 7月23日)

葉いもち発生量 前年の2倍強、穂いもちの多発生に注意!

イネいもち病(葉いもち)については7月1日付けで注意報を発表し、防除の徹底を呼びかけてきました。しかし、その後も病勢は活発で、今後、穂いもちの多発生が予想されますので、注意報を発表し

ます。現地では適切な防除対策を講じ、本病による被害を最小限に食い止めるよう指導願います。

1. 病害虫名 いもち病（穂いもち）
2. 発生地域 県下全域（主としてコシヒカリ栽培地帯）
3. 発生時期 7月下旬から
4. 発生量 やや多い～多い

5. 注意報発表の根拠

- 1) 7月20～22日にかけて行った県内の発病状況調査で、葉いもちの発病株率は46.8%（前年同期18.5%）、発病度が13.3（前年同期5.4）と、穂いもちが多発生した前年に比べて著しく高い（表1）。
- 2) 依然として進展型病斑が認められる圃場も散見され、梅雨明け以降も病勢の進展は続いている。また、穂いもちの発生と密接に関係する止葉や次葉など上位葉に病斑を生じている圃場も多い。
- 3) 穂肥の施用等によりイネの養分吸収が旺盛となることなどから、罹病しやすい状態がしばらく続くものと思われる。
- 4) 向こう1か月の気象予報によると、気温、降水量とも平年並みと予想されており、本病の発生をとくに抑制する要因とはならない。

表1 葉いもちの発生状況

年次	調査圃場数	発生圃場率	発病株率	発病度
H16年	290	68.3%	46.8%	13.3
内訳				
東部	190	70.0	45.6	13.0
西部	100	65.0	49.0	13.6
H15年	285	44.9	18.5	5.4

注) 7月22日現在

6. 防除対策及び防除上の注意事項

- 1) 穂いもちは発生した後の防除では効果が劣るので、裏面の表2に示した薬剤による予防散布を行う。
 - (1) 散布時期及び回数
 - ア. 散布剤（液剤・粉剤）

穂ばらみ期（出穂2～3日前）及び穂揃期～3日後の2回散布する。葉いもちの多発圃場では傾穂期にさらに1回散布する。散布量は、液剤は10a当り液剤100～150 $\frac{L}{a}$ 、粉剤では各剤の農薬使用基準に従い散布する。
 - イ. 水面施用剤（粒剤等）

各剤の農薬使用基準に従い、適量を遅れないよう散布する。また、葉いもちが多発生している圃場では液剤・粉剤と併用する。
 - 2) 出穂まで期間のある品種で葉いもちが多発生している場合は、葉いもちの防除を行い、伝染源量を少なくする。
 - 3) 雨が降り続く場合には雨の止み間に散布する。この場合、散布後ほぼ3時間経過すれば、降雨の影響は少ない。しかし、この時間内におよそ5mm以上の降雨があると防除効果が減退することがある。

表2 いもち病（穂いもち）の防除薬剤

薬剤名	使用量(10a当り)	使用時期及び使用回数
散布剤		
ブラシン水和剤	1000倍	収穫30日前まで・2回以内
ブラシン粉剤DL	3～4kg	収穫21日前まで・2回以内
ブラシンフロアブル	1000倍	収穫21日前まで・2回以内
ラブサイド水和剤	1000～1500倍	収穫21日前まで・穂ばらみ期以降は4回以内
ラブサイドフロアブル	1000～1500倍	収穫21日前まで・穂ばらみ期以降は4回以内
ラブサイド粉剤DL	3～4kg	収穫21日前まで・穂ばらみ期以降は4回以内
ラブサイドベフラン粉剤	3～4kg	収穫30日前まで・穂ばらみ期～穂揃期3回以内
カスラブサイド粉剤3	3～4kg	収穫21日前まで・穂ばらみ期以降は4回以内
ビームゾル	1000倍	収穫7日前まで・3回以内（本田期）

ビーム粉剤	3～4kg	収穫7日前まで・3回以内（本田期）
デラウスフロアブル	1000～1500倍	収穫14日前まで・2回以内
デラウス粉剤	3～4kg	収穫14日前まで・2回以内
アチーブ粉剤D L	3～4kg	収穫14日前まで・3回以内
シラハゲン粉剤S	3～4kg	収穫14日前まで・3回以内
カスミン水和剤	1000倍	収穫14日前まで・5回以内
カスミン粉剤	3～4kg	収穫14日前まで・5回以内
カスミン液剤	1000倍	収穫14日前まで・5回以内
カスガマイシン銅水和剤	2000倍	出穂10日前まで・1回以内
フジワン乳剤	1000倍	収穫14日前まで・3回以内
フジワン粉剤D L	3～4kg	収穫14日前まで・3回以内
ヒノザン乳剤30	1000倍	収穫21日前まで・3回以内
ヒノザン粉剤25D L	3～4kg	収穫21日前まで・3回以内
キタジンP乳剤	800～1200倍	収穫21日前まで・3回以内
キタジンP粉剤30D L	3～4kg	収穫21日前まで・3回以内

水面施用剤

コラトップ粒剤5	3～4kg	出穂30～5日前まで・2回以内
コラトップ1キロ粒剤12	1～1.5kg	出穂30～5日前まで・2回以内
コラトップジャンボ	10～13個	出穂30～5日前・2回以内
コラトップパック	10～13個	出穂30～5日前・2回以内
アチーブ粒剤7	3～4kg	出穂30～5日前まで(収穫21日前まで)・3回以内
アチーブ1キロ粒剤24	0.75～1kg	出穂30～5日前まで(収穫21日前まで)・3回以内
フジワン1キロ粒剤	1～1.5kg	出穂30～10日前まで(収穫45日前まで)・3回以内
フジワン粒剤	3～5kg	出穂30～10日前まで・3回以内
キタジンP粒剤	3～5kg	出穂20～7日前・2回以内

注) 薬剤の使用にあたっては、農薬使用基準ならびに本県農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。

(5) 第5号(平成16年 9月 1日)

キャベツなどのアブラナ科野菜やダイズ等でハスモンヨトウによる被害が多発生することが予想されますので注意報を発表します。現地では発生状況の把握に努め、適切な防除対策を講じてください。

1. 病害虫名 **ハスモンヨトウ**
2. 発生地域 **県下全域**
3. 作物 **アブラナ科野菜(キャベツなど)・ダイズなど**
4. 発生時期 **9月上旬～**
5. 発生量 **やや多い～多い**

6. 注意報発表の根拠

- 1) フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の誘殺数は平年に比べて多い(表1)。
- 2) 8月下旬の夏秋キャベツでは寄生株率、発生圃場率ともに高い(表2)。
- 3) 8月下旬のダイズでは白変葉の発生はやや少ないが、発生圃場率がやや高い(表3)。
- 4) 現在、卵と若齢幼虫が主体であり、今後幼虫の分散とともに寄生株率の上昇が懸念される。
- 5) 9月の気象は、気温は平年並みか高く、降水量は平年並みか多いと予想されており、本種の発生にやや助長的である。

7. 耕種法による防除

ダイズ

白変葉の発生に注意し、若齢幼虫を葉ごと切り取ってつぶす。

8. 薬剤による防除

1) 種類および濃度

キャベツ、ハクサイ、ダイコン

薬 剤 名	キャベツ	ハクサイ	ダイコン
	(収穫前日数/総使用回数)		
有機リン剤			
P A P 乳剤 1000倍	14日/4回	21日/3回	30日/2回
レルダン乳剤25 1000倍	7日/4回	30日/2回	30日/2回
DDVP乳剤(75%) 1500～2000倍	3日/5回	7日/5回	14日/6回
ホスパール剤 1000倍	21日/1回	30日/1回	30日/1回

オルトラン水和剤 1000～1500倍	7日／3回	14日／3回	—
IGR剤			
アタブロン乳剤 2000倍	7日／4回	7日／4回	14日／3回
カスケード乳剤 2000～4000倍	14日／2回	—	—
ノーモルト乳剤 2000倍	7日／2回	—	—
マッチ乳剤 3000倍	7日／3回	—	—
カーバメート剤			
ランネート45水和剤 1000～2000倍	3日／3回	—	—
ラービフロアブル1000倍	—	—	21日／2回
ラービフロアブル750～1000倍	7日／4回	7日／2回	—
ラービン水和剤75 1000～1500倍	7日／4回	7日／2回	—
BT剤(農作物病害虫雑草防除指針参照)			
その他の殺虫剤			
アフアーム乳剤 1000～2000倍	7日／3回	—	—
ガンバ水和剤 1500倍	21日／2回	—	—
トルネードフロアブル 2000倍	7日／2回	—	—
マトリックフロアブル 2000倍	7日／4回	—	—
プレオフロアブル1000倍	7日／2回	—	—

ブロッコリー、カブ

薬 剤 名	ブロッコリー		カブ	
	(収穫前日数／総使用回数)			
P A P乳剤 1000倍	21日／2回		30日／2回	
DDVP乳剤(75%) 1500～2000倍	7日／6回		14日／5回	

ダイズ

薬 剤 名	(収穫前日数／総使用回数)	
合成ピレスロイド剤(農作物病害虫雑草防除指針参照)		
有機リン剤		
P A P乳剤 1000倍	7日／2回	
P A P粉剤2	7日／2回	
オルトラン水和剤 1000倍	60日／3回	
ダーズバン乳剤40 1500倍	7日／2回	
IGR剤		
アタブロン乳剤 2000倍	14日／2回	
ノーモルト乳剤 2000倍	14日／2回	
ロムダンフロアブル 2000倍	14日／3回	
ロムダンゾル 1000倍	14日／3回	
ロムダン粉剤DL	14日／3回	
BT剤(農作物病害虫雑草防除指針参照)		
カーバメート剤		
ラービフロアブル 750～1000倍	14日／2回	
ランネート45水和剤 1000～2000倍	14日／4回	
その他の殺虫剤		
トルネードフロアブル 2000倍	7日／2回	
マトリックフロアブル 2000～3000倍	前日／3回	

2) 散布量 10 a 当たり液剤100～300ℓ、粉剤 4 kg

3) 散布時期・留意点

現在発生の多い圃場では直ちに散布する。その後は発生に応じて散布する。系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

4) その他の注意事項

- (1) 本種は上記の作物のほか花き類、ナス、トマト、ヤマイモ、ネギ、タマネギ、イチゴ、ブドウ、カキなど多くの作物を加害する。
- (2) 老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので若齢幼虫期に重点をおいて防除する。
- (3) 施設栽培ではハウスサイド、出入り口、天窗等の開口部に防虫のネットを被覆するなど、成虫の侵入防止に努める。
- (4) 薬剤の使用にあたっては農薬の使用基準および本県農作物病害虫雑草防除指針を遵守する。

9. 付 表

表1 フェロモントラップによるハスモンヨトウの雄成虫の半旬別誘殺数(頭)

調査地点		調 査 時 期						9月 1半旬
		7月 第6半旬	1半旬	2半旬	8月 3半旬	4半旬	5半旬	
出雲市	本年	101	216	86	51	78	145	126
	平年	35.5	54.9	90.3	113.7	50.8	65.2	130.7
益田市	本年	264	409	87	194	464	266	501
	平年	98.7	89.8	107.3	137.2	184.2	182.4	268.5

表2 ハスモンヨトウの発生状況(夏秋キャベツ)

調査月日		寄生株率(%)	発生圃場率(%)
8月27,30日	本年	13.3	83.3
	平年	3.8	30.8

表3 ハスモンヨトウの発生状況(ダイズ)

調査月日		1a当たり白変葉か所数	発生圃場率(%)
8月27,30日	本年	0.8	52.6
	平年	1.1	43.4

3) 臨時情報

(1) 第1号(平成16年 5月10日)

果樹カメムシ類の発生が早く、発生量も多いため幼果に被害が出る恐れあり

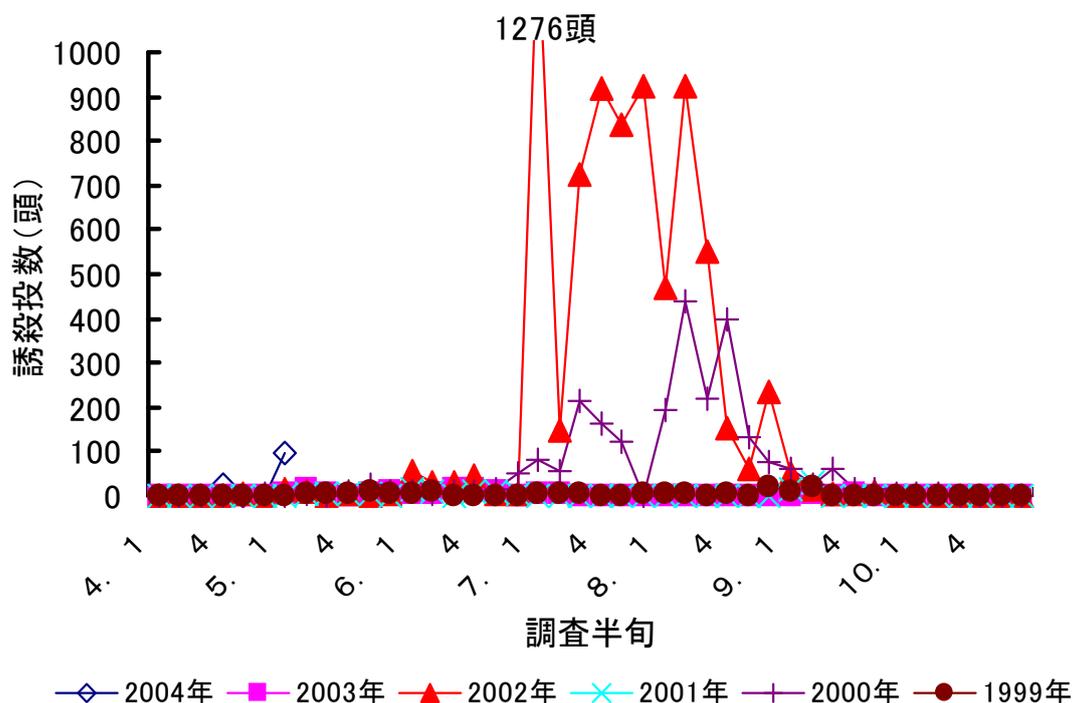
果樹を加害するカメムシ類の発生が平年に比べ早く、袋かけ前のナシ、その他モモ、ウメなどで被害の恐れがあります。今後、気温が暖かくなると活動が活発化し、果樹園への飛来が増加すると考えられます。現地ではカメムシ類の発生状況の把握につとめ、適切な防除対策を講じてください。

記

1. 病害虫名 果樹を加害するカメムシ類
2. 発生地域 果樹栽培地帯
3. 発生時期 5月中旬～
4. 発生量 多い

5. 発表の根拠

- 1) 5月第1半旬までのチャバネアオカメムシのフェロモントラップでの調査結果では誘殺開始時期は4月第4半旬と過去5年の調査と比べやや早い。また、予察灯においても4月第5半旬と平年(5月第1半旬～第4半旬)に比べて早い。
 - 2) フェロモントラップでの誘殺数は過去5年間の同時期に比べて多い(第1図)。
 - 3) 果樹カメムシ類は、越冬場所を出た後、近辺にナシ、モモ、ウメ、ビワなどの果樹があると、飛来し幼果に被害をもたらす恐れがある。
 - 4) 向こう1か月気象予報(5月7日・広島地方気象台発表)によると、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いと予想され、今後も発生に好適な条件が継続すると考えられる。
6. 防除対策
- 1) 発生の動向に注意し、発生を認めた園では速やかに薬剤散布を行う。
 - 2) 薬剤の選定に当たっては、第2表を参照にし、ナシについてはアブラムシ類防除の時期でもあるため両方に登録のある薬剤を用いる。農薬安全使用基準ならびに農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。



第1図 チャバネアオカメムシのフェロモントラップによる誘殺数

第1表 ナシのカメムシ類での主な登録薬剤

薬剤名	使用基準及び量	適正使用基準	備考
アドマイヤー水和剤	1000倍	30日前／2回	
アドマイヤー顆粒水和剤	10000倍	30日前／2回	
ジノテフラン顆粒水溶剤	2000倍	7日前／2回	
スプラサイド水和剤	1500倍	14日前／3回	有袋栽培
	1500倍	45日前／3回	無袋栽培
スミチオン水和剤	800～1200倍	14日前／6回	有袋栽培
	800～1200倍	21日前／6回	無袋栽培
ベストガード水溶剤	1000倍	14日前／3回	

(2) 第2号 (平成16年 6月16日)

イネいもち病 初期の病勢活発

本年のいもち病の初発生は早く、発生量も平年に比べて高くなっています。また、一部の圃場では補植用の置き苗の他、移植苗にも進展型の病斑が観察され、今後、急速な病勢進展が懸念されますので、臨時情報を発表します。

現地では置き苗の処分を早急に行うとともに、本田での発生に注意し、発生のみられた場合には適切な防除対策を講じ、被害を最小限にいとめるよう指導をお願いします。

記

1. 病害虫名 イネいもち病 (葉いもち)
2. 発生地域 県下全域
3. 発生時期 早い
4. 発生量 やや多い
5. 臨時情報発表の根拠

- 1) 6月上旬の巡回調査の結果、置き苗が放置された圃場の3.0% (前年同期発生率1.2%) で、置き苗にいもち病の発生がみられた。

- 2) 初発生は、ここ5ヶ年で最も早かった平成11、12年の6月9日より1週間早い6月2日に確認された。
 - 3) 6月15日現在の本田での発病状況は、発生圃場率が12.9%（平年値1.0%）、発病株率は3.0%（平年値0.1%）と、いずれも平年に比べて高い。
 - 4) 葉いもちの感染に好適な気象条件が6月8日及び12日に県下の広い範囲に出現し、潜伏感染も見込まれる。
6. 防除対策および防除上の注意事項
- 1) 本田の置き苗や畦畔に放置された苗は、本病の主要な伝染源となるので、補植後は直ちに処分する（6月3日現在、39%の圃場で置き苗が放置）。
 - 2) 本田についても調査を行い、発生がみられた場合には薬剤により防除を行う。
なお、薬剤の使用に当たっては、農薬安全使用基準ならびに本県防除指針の注意事項を遵守する。

(1) 種類および濃度

アチーブ粉剤、同粒剤7、同1キロ粒剤24
 オリゼメート粒剤、同1キロ粒剤、同パック
 オリブライト1キロ粒剤、同パック
 カスガマイシン・同水和剤 2000倍
 カスラブサイド粉剤3
 カスミン水和剤 1000倍、同液剤 1000倍、同粉剤
 キタジンP乳剤 800～1200倍、同粉剤30、同粒剤
 コラトップ粒剤5、同1キロ粒剤12、同ジャンボ、同パック
 シラハゲン粉剤S
 デラウスフロアブル 1000～1500倍、同粉剤
 ビームゾル 1000倍、同水和剤75 4000倍、同粉剤
 ヒノザン乳剤30 1000倍、同粉剤25
 ブイゲット粒剤
 フジワン乳剤 1000倍、同粉剤、同粒剤、同1キロ粒剤
 ブラシン水和剤 1000倍、同フロアブル 1000倍、同粉剤
 ラブサイド水和剤 1000～1500倍、同フロアブル 1000～1500倍、同粉剤
 ラブサイドベフラン粉剤

(2) 散布量

10a当り
 液剤100～150ℓ、
 粉剤 3～4 kg。

いもち病の初発生は平年に比べて早く、発生量も平年に比べて高く推移しています。本田に放置された置き苗におけるいもち病の発病率がやや高く、罹病苗の植え込み苗いもち移植苗での発病株率も高いことから、今後、移植苗への伝染が懸念されますので臨時情報を発表します。

現地では置き苗の処分を早急に行うとともに、本田での発生に注意し、発生のみられた場合には適切な防除対策を講じ、被害を最小限に食い止めるよう指導をお願いします。

(3) 第3号（平成16年12月22日）

MBI-D剤耐性イネいもち病菌の発生について

イネいもち病の防除薬剤であるMBI-D剤（シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤、商品名：ウィン、デラウス及びアチーブの名前を含む剤）に対する薬剤耐性菌は、近年、西日本地域で発生が顕在化し、いもち病の多発生要因の一つとなっています。

島根県内でも、昨年、きわめて低率ながら発生が認められたため、本年、改めて県内各地から葉いもちの罹病標本を採取し、農薬メーカーの協力により耐性菌検定を実施しました。その結果、薬剤耐性菌の割合は大幅に増加していることが明らかになりましたので、臨時情報を発表します。

記

1. MBI-D剤耐性菌の発生状況

- 1) 巡回調査地点を中心に葉いもちが発生した圃場92圃場から病斑を採取し、単孢子分離した128菌株を耐性菌検定に供試した結果、調査圃場の28.3%、供試菌株の30.5%で耐性菌の発生が認められた（表1）。
- 2) 地域別では県西部で発生が多く、発生圃場率は42.0%、耐性菌率は44.0%と県東部の約4倍のポイントとなった（表1）。
- 3) 前年度の耐性菌の発生は95菌株中1菌株のみであったことから、耐性菌の割合は大幅に増加しており、発生地域も拡大しているものと推察される（表1）。

表1 MBI-D剤耐性菌の発生状況

年次・調査地域	調査圃場数	耐性菌発生圃場率	調査菌株数	耐性菌率
H16年 県全体	92	28.3%	128	30.5%
東 部	42	11.9	53	11.3
西 部	50	42.0	75	44.0
H15年 県全体			95	1.1

2. 防除対策

1) 薬剤耐性菌の分布が拡大傾向にあることから、次年度以降、MBI-D剤の取り扱いには注意する。

特に、本年MBI-D剤を使用したにもかかわらず本田初期からいもち病の発生が活発にみられた地域では本剤耐性菌の発生が懸念されるので、異なる系統の箱処理剤（Dr. オリゼ剤、ビルダー剤、ブイゲット剤、デジタルコラトップ剤、ビーム剤等）を使用することが望ましい。

2) 耕種的な防除対策（健全種子の更新、塩水選、種子消毒の実施）を徹底する。

3) 次年度以降、当該薬剤を使用して防除効果の低下が確認された場合は、作用機作の異なる薬剤による追加防除を行う。

参考 農林振興センター別MBI-D剤耐性菌の発生状況

農林振興センター名	調査圃場数	耐性菌発生圃場率	調査菌株数	耐性菌率
松江	26	15.4%	35	11.4%
木次	7	0	7	0
出雲	9	11.1	11	18.2
川本	14	28.6	24	20.8
浜田	11	0	11	0
益田	25	68.0	40	70.0